

優婆塞の宮云々源氏物語。橋姫の巻に出づ。

平家物語 十二卷。異本多し。平氏の勃興より滅亡までを記せり。作者不詳。

一一 蓬萊山

今様

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、

萬歳千秋重なれり。

松の枝には鶴巢くひ、

巖がそばには龜遊ぶ。

君をはじめて

君をはじめて見る時は、

千代も經ぬべし姫小松、

お前の池なる龜岡に、

鶴こそ群れゐて遊ぶなれ。

松の木かけ

松の木かけに立ちよりて、

岩もる水をむすぶ間に、

扇の風も忘られて、

夏なき年とぞ思ひぬる。

池の涼しき

今様 中古時代に行はれたる謠しもの。七五の調にて八句を連ぬるを普通とす。

池の涼しき汀には、夏のかげこそなかりけれ。
こだかき松を吹く風の、聲も秋とぞ聞えぬる。

朗詠

春 暖

都 良 香

氣霽れては風新柳の髪を梳り、
氷消えては波舊苔の鬚を洗ふ。

夏 日 閑 に し て 暑 を 避 く

源 英 明

池涼しうして水に三伏の夏無く、
松高うして風に一聲の秋有り。

菊

紀 長 谷 雄

嵐陰暮れなむとするとき、松柏の後に凋まむことを契り、

朗詠 和漢の詩句中秀句にして朗吟に適したるものを摘出して、朗吟せしもの。

都良香 中古の詩人。文章博士。元慶二年(五三三)年歿、年四十六。
源英明 中古の詩人。天慶二(一五九九)年歿。

紀長谷雄 中古の詩人。文章博士。延喜十二(一五七二)年歿、年六十八。

秋景早く移るとき、芝蘭の先づ敗るゝを嘲る。

雪

白 居 易

雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、
人は鶴氅を被て立つて徘徊す。

子 日

橘 在 列

松根に倚りて腰を摩すれば、千年の翠手に満ち、
梅花を折りて頭に挿めば、二月の雪衣に落つ。

帝 王

紀 淑 望

仁は秋津洲の外に流れ、

恵は筑波山の陰よりも茂く、

淵變じて瀬となる聲寂々として口を閉ぢ、

沙長じて巖となる頰、洋々として耳に満てり。

白居易 支那唐代の詩人。樂天と稱す。(西紀七七三―一八四七年)

橘在列 中古の詩人。歿年未詳。

紀淑望 中古の詩人。歌人。大學頭。歿年未詳。